第 77 回全国中学校・高等学校ダンスコンクール　総評

審査委員長　森　立子

今年も、多数の学校の参加のもと、全国中学校・高等学校ダンスコンクールが開催されました。中学校の部には 25 作品、高等学校の部（団体部門）には 44 作品、高等学校の部（ソロ・デュエット部門）には 12 作品のエントリーがありました。どの作品にも、その学校ならではの個性と、ダンスへの強い思いが刻まれており、審査をしている私たちも、数々の素晴らしい作品に出合う幸福感を味わうこととなりました。このような素敵な時間を私たちに与えてくださり、そしてまた共有してくださったみなさんに心より感謝いたします。

さて、みなさんにはコンクール当日にも講評をお伝えいたしましたが、あらためてここにその内容を総評として記します。6 名の審査員がみなさんの作品を拝見した上で、ぜひともお伝えしておきたいと考えた点をまとめました。さらにこの他に、各作品についての講評も個別にお送りしますので、これらを参考にしていただき、今後の活動のさらなる展開へとつなげていただければ幸いです。

このコンクールでは、以下の 5 つの観点を軸に審査をしています。

① 身体がよく訓練され、鍛えられているか
② 主題にふさわしい表現が行われているか
③ 作品の展開・構成に工夫が見られるか
④ 作品全体が独創性にあふれ、何らかの魅力があるか
⑤ 総合的な完成度が高いかどうか

① について

・まずは何よりも基礎的な訓練を大事にすることを心がけてください。ある振りを演じたいと思ったときに、その振りだけ何度も練習すれば良い、というわけではありません。自分が表現したいことを表現できるだけの身体を作ること。そうして鍛えられた身体があってこそ、自由に演じることや技術的に上達していくことが可能になります。

・団体部門の中で、演技をしているメンバーの間に、技術的なばらつきがみられるケースがありました。全員が同じ技術水準に達していることが理想ですし、日々そのために努力を重ねていただきたいのですが、その一方で、振りの難易度を調整するといった工夫が出来るのではないかとも思われました。

・踊る際には、身体の末端の表現がおろそかにならないように注意してください。特に、つま先・足先の見せ方、走り方をどのようにしたいのか、意識するようにすると良いでしょう。

② について

・斬新なテーマに取り組んだ作品が多数あり、みなさんのみずみずしい感性、好奇心、探求心に感心しました。若いみなさんがどのようにこの世界を捉えているのかが、みなさんの様々な作品から見えてくるようでした。ただ、中学校の部では、コンクールで点が取りやすいテーマに寄せてしまっているのではないか、と感じられる作品もありました。テーマ選びに関しては、チャレンジする気持ちを忘れないでいただきたいと思います。

・作品創作の際には、自分たちの技術に合わせて作品を作っていくというよりも、むしろ作品ごとに新たに技術や表現法を発明するようなつもりで進められると良いでしょう。今回の審査でも、どのように見せたいのかが明確で、自分たちで見つけた動きをしっかりと表現できている作品には高い評価が集まりました。

・技術的な要素、例えばリフト、ジャンプ、ターンなどを行う際に「技術を誇示する」だけにとどまることのないよう注意してください。これらの要素が、作品の展開の中に有機的に組み込まれていることが大事です。

・小道具の使い方が上手く、大きな効果をあげていた作品があった一方で、小道具を使いこなせていないのではないかという印象を与えていた作品もありました。アイディアがアイディアで終わってしまわないように、もう一歩掘り下げた工夫が欲しいですね。

③ について

・序盤、中盤はとても丁寧に作りこまれているにもかかわらず、最後の部分であっさりと終わってしまい、物足りなさを感じさせる作品がありました。作品の最後の部分は、文章で言えば句点に相当する部分です。終わり方をよく研究することが必要です。

・振りと振りとの間のつなぎの部分が、「単なるつなぎの時間」になってしまわないように注意してください。観る者を作品世界へと引き込む力が強い作品は、このつなぎの部分がとてもうまく作られており、振りから振りへと流れるような自然な展開がみられました。

・出入りも含め、移動が表現の一部であることを忘れないでください。この配慮は、作品を創作する際にも、それを演じる際にも必要です。

④ および ⑤について

・どの作品にも独創性がみられ、みなさんが自分なりの表現を探ろうとしていることが感じられました。ただ、同じ振りをしていても、そこに「呼吸」が見えるかどうかで、著しく印象が変わります。レベルの高い作品・演技では、この呼吸が観る側にもしっかりと伝わってきました。常に、呼吸を大事にすることを意識してください。

・作品の審査は、あらゆる点を総合的に判断して行われます。素晴らしい演技をしているのに、音楽の編集に難があり（複数の曲を使用している場合に、それぞれの曲の音

質が違ってしまっている／クライマックスの部分で逆に音量が絞られてしまっている／曲の切り方が唐突すぎる、など)、作品全体としての質が減じられてしまっていると感じられた例もありました。また、衣装についても、技術不足の部分をかえって強調してしまうようなスカート丈であったり、あるいは衣装丈にばらつきがあったりする例が見うけられました。作品を創作するにあたっては、総合的な芸術作品を作り上げる気概をもって、あらゆる細部まで十分に検討を重ねていただければと思います。

・例年と同様、審査団には専門ジャンルをそれぞれ異にする審査員が集まりましたが、高く評価する作品について大きな違いはみられませんでした。総合的にみて完成度の高い作品は、どんなジャンルの人にも強い印象を与え、心を揺さぶる力を持っているのです。

最後にあらためまして、本コンクールに参加してくださったみなさん、指導にたずさわられた先生方や、支えていただきましたご両親や関係の方々、すべてのみなさまに御礼申し上げます。生徒のみなさんには、これから先もダンスへの思いを大事に育てていっていただきたい、そして若いみなさんならではの感性で、ダンスの世界をさらに豊かなものへと広げていっていただきたいと願っております。

審査員一覧

◎森　　立子（日本女子体育大学教授）
中村　恩恵（日本女子体育大学准教授）
加藤みや子（舞踊家）
小室眞由子（ダンサー/振付家）
三井　　聡（ダンサー/振付家）
ＭＥＤＵＳＡ（ダンサー/振付家）